近世大坂における石工・石商

杉本　厚典

要旨　近世の大坂には多くの石工が活動していた。天岸正男氏（天岸1979）や奇多樓各主人（本名不詳）（奇多樓各主人1934）らによって、石工の居所の略図が作られているが、本稿では『難波丸』『難波丸綱目』などの大坂案内記の記載をもとにして、石工のみならず、石商の所在も明らかにして分布図を作成し、近世大坂の石材産業の分布傾向を検討した。その結果、石材流通については、安治川、木津川に石材の集積地があり、そこから堀川を経由し、松屋町、長堀十丁目、西長堀の権右衛門町等の石問屋にもたらされ、周辺の東横堀、長堀、西横堀、炭屋町などの石工たちに供給されていた可能性を示した。また、銅吹所と石工・石商が近い場所に立地する事例を炭屋町、茂左衛門町とその周辺に見出すことができ、重量物の運搬に舟運が適していたと考えた。18世紀中葉に石問屋が多く出現し、それに応じて石工も増加する。このような中、小島屋半兵衛や御影屋新三郎ら、京阪神一円や日本列島各地で製品が見られる大阪を代表する石工が誕生したと考えた。

本稿の目的

近世の大坂には多くの石工が活動していた。天岸正男氏（天岸1979）や 奇多樓各主人（本名不詳）（奇多樓各主人1934）らによって、石工の居所の略図が作られているが、その分布傾向については必ずしも明確ではない。そこで『難波丸』、『難波丸綱目』等の大坂案内記の記載をもとに石工のみならず、石商等の所在も明らかにした分布図を作成し、近世大坂の石材産業の分布傾向を検討する。さらに、町ごとの石工・石商の特徴を描きだし、その盛衰について触れてみたい。

１、研究史と分析に用いたデータ

近世の大坂で活躍した石工については、鳥居・燈籠や石塔等に刻まれた石工名をもとに研究が進められてきた。住吉大社の石燈籠を調査した梅原忠治郎氏は、「石工の名の鐫つたのはあまりに少い、その中にも「大坂西横掘見かげや新三郎」の名が多かつた。」（梅原忠治郎1931）と、燈籠に残された石工について触れられている。

奇多樓各主人は、大阪近郊の神社の鳥居・燈籠・水盆等に刻まれている銘文を調査し、奉納年および、石工名とその住所について調べている（奇多樓各主人1934）。この論文に紹介された石工は44名であり、そのうち39名の住所が明らかにされている。それらは西横堀（西堀）、西横堀玉沢町、西横堀権右衛門町、西横堀相生橋、西横堀篭屋町、炭屋町、長堀、下寺町源正寺坂、松屋町、松屋町九ノ助橋、上町、伏見堀、伏見堀石屋町、北堀江二丁目、立売堀、新川、日向町である。

大阪歴史博物館　研究紀要
第17号　41－64ページ　2019年3月

石工の経歴についても奇多樓各主人は検討しており、梅原氏の指摘した石工「大坂西横掘見かげや新三郎」について、炭屋町の御影屋新三郎豊昌について、姓が飯田氏であり、金屋橋東詰に工房を持ち、一時住吉大社の専属であったが明治年間に廃業したことを明らかにしている。奇多樓各主人は昭和初期における石造物の実地調査を基礎としており、大阪における石工研究の先駆的な業績として注目される。

仏教関連の石造物について、天岸正男氏は高野山奥院について調査を行い、大坂の石工がこれらの石造物の製作に関わっていることを明らかにした（天岸正男1972）（註１）。具体的には62件の石造物のうち、40件が大坂の職人によって作られていたことを示す。大坂に次いで多い石造物が泉州の６件であることをふまえると、大坂での石材加工業が盛んであったことがうかがえる。さらに、天岸氏は大坂の石工について検討し、京阪神の寺社仏閣の石造物をもとにして、40名の石工を明らかにし、その居住地を略図にした。これによって西横堀から西側の船場に多い傾向が明らかになった（天岸正男1979）。

宝篋印塔や五輪塔といった石塔類に対して、切石細工についてのまとまった研究は少なかったが、奈良文化財同好会は狛犬を対象にして大阪・奈良の神社を悉皆調査し、大坂の石工について検討している（奈良文化財同好会1999）。

この研究によると石造の狛犬は大阪府下において慶長期に出現するとされる。守口市津嶋部神社、島本町若山神社、高槻市春日神に奉納された狛犬が江戸時代初期のものである。興味深いことにこれらはいずれも越前足羽山産の笏谷石製であり、初期の石製狛犬が北陸からの影響があったことが指摘されている。一方、大坂で作られた石製狛犬（浪速狛犬）は、田蓑神社の元禄15年銘のものが最も古く、木造狛犬を模したものとされている。その後、元文から安永期にかけて、堺系の石工により住吉型狛犬が生み出され、寛保から寛延・宝暦期にかけて、西横堀系の石工によって「宋型」、「次郎兵衛型」、「上之宮型」、「御影屋型」が次々と創出されたという。

さらに、狛犬の特徴や作風の変化について言及するために、狛犬を製作した石工を西横堀、長堀、東横堀ごとに次のように分類している。

西横堀：御影屋小兵衛、西川屋五良兵衛、小島屋半兵衛、御影屋新三郎、和泉屋四郎兵衛、石屋平兵衛。

長堀：岡田屋治兵衛。

東横堀：大坂屋与三兵衛、泉屋勘兵衛、杉屋和助。

こうした地域ごとの分類によってあらためて分かることは、西横堀系の石工の活動が盛んで、石工も多く居住していたことである。狛犬の作数の多い石工とその活動場所が、この研究により明確になったことは大きな成果と言える。

飛田範夫氏は、『人倫訓蒙図彙』『難波雀』「諸商人・諸職人売物所付」部分、『難波丸綱目』「諸商人・諸職人売物所付」部分、『浪華買物独案内』、『大坂商工銘家集』、『摂津名所図会』等をもとにして、大坂の石屋が主に西横堀、長堀、東横堀に分布し、その他、西横堀に繋がる西船場の江戸堀、京町堀、阿波堀、立売堀にも見られることを指摘した（飛田範夫2012）。そして西横堀に石屋が多い理由として、

木津川・安治川に近く石の運搬に便利で、背後に石の保管、展示をすることのできる広い土地があったためと考えた。また、西横堀に近い阿波堀、立売堀などで石屋が見られるのも、石の運搬がしやすいためであったとしている。

飛田氏は大坂に運ばれてきた石の産地についても触れ、代表的な石材として、『摂津名所図会』に挙げられた摂津産御影石（花崗岩）、播磨産竜山石（凝灰岩）、和泉産和泉石（砂岩）、田宮仲宣『所以者何』に述べられている豊島石を紹介している。これらの石材は発掘調査でも良く出土しており、史料の記載を裏付けている。

近年、関根達人氏は住吉大社、高野山奥院の石造物を再調査し、大坂の代表的な石工として、和泉屋仁右衛門、名田屋太郎兵衛、伊予屋市兵衛、岡田屋治兵衛、御影屋新三郎、小嶋屋半兵衛らを紹介している（関根達人2017）。彼らは、作品例が多い石工である。とりわけ作例の多い御影屋新三郎について、豊高（1760年代～90年代）、豊昌（1800年代）、昌興（1810年代～？）、明尊（1860年代）と４代が確認され、明治に入ると飯田新三郎を名乗ったとされている。関根氏は中・近世の石材流通を、石材産地－加工－消費地の関連から、列島規模で復元する研究を継続されており、今後の成果が注目される。

今回の分析に用いたデータは次のとおりである。

石造物に関する資料集成は奈良文化財同好会1999、天岸正男1972、奇多樓各主人1934 を用いた（註２）。史料は『難波丸』（元禄９（1696）年）、『難波丸綱目』（延享５（1748）年）、『難波丸綱目』（安永６（1777）年）、『商人買物独案内』（文政７（1824）年）、『浪花商工名家集』（弘化３（1846）年）、『商工技芸　浪華の魁』（以下、『浪華の魁』と略述）（明治15（1882）年）をもとにした。これらの資料集・史料から得られた石工・石商のデータは表１に示した。

２、大坂における近世の石材流通

史料をもとにすると、大坂へもたらされる石材は、家普請に用いるものと、石燈籠や鳥居、狛犬などの切石細工に用いるものとがあったことがうかがえる。前者を扱ったのが石問屋である。石問屋は明和７（1770）年には安治川・木津川の十番杭内に入ってくる石材を現金で残らず引き取り、これを七軒の石屋等に売り渡し、残余を安治川、木津川の河口の石置き場（「川口問屋浜」）に置くものとされていた。しかし石問屋の手を経ず、船頭が石屋に直接販売する例もあり、禁止する触書が嘉永６（1853）年に出される（『大阪市史』第２、p.868）。

また、石燈籠や鳥居、狛犬などの細工用の石は切石屋仲間が取り扱った（『大阪経済資料集成』第２巻、p.292）。切石屋仲間に加わらず、町屋普請場で切石細工を行う者があり、これを禁止する触書が安政４（1857）年に出される（同上）。さらに寛政12（1800）年から天保３（1832）年にかけて、手伝人足が切石屋と同じ業務を行うことを禁止する内容の御触及口達が10回出されており、切石屋仲間以外の職人が切石細工に従事することも多かったようである。

瀬戸内地方の花崗岩や豊島石、和泉砂岩などが多くもたらされたとみられる。竜山石は天保８（1837）年の大塩平八郎の乱後、復興のために大坂での石材需要が増したため、姫路藩が藩の専売とし、石の

値段が騰貴したことが記される（『大阪市史』第２、p.690）。石材産地によって安治川、木津川のいずれを用いるかの区別があったかどうか不明である。大坂の石屋はこの安治川・木津川の石置き場から堀川の舟運によって石材を市中へ搬入していた（『大阪市史』第２）。石屋が石材を川に落としてしまうこともあったようで、石片を河中に投入することを禁じる口達書が出されている。産地から安治川・木津川の川口へ、そして川口から市中へといった段階を経て、石工のもとに石材が届けられた。

３、各大坂案内記における石工・石商の分布

元禄９（1696）年の『難波丸』（図１）によると西横堀、西横堀と長堀の交差する四ツ橋、松屋町筋から丹波屋町に石工や石屋が分布する。石工は船場以外の場所では天満の石屋の浜にも認められ、堀川沿いにまとまっている状況が見られる。また、砥石屋、硯屋は北船場の東横堀西側に分布する。

延享５（1748）年の『難波丸綱目』（図２）では西横堀、松屋町の他に長堀にも石工・石屋が出現し、石臼が西横堀の南北で作られるようになる。また、諸国石問屋が西横堀の権右衛門町、長堀十丁目、松屋町筋の対岸である塩町一丁目に出現し石材流通の拠点となる。東横堀の西側、淡路町から備後町、本町にかけて多くの砥石問屋が見られる。いずれも一丁目にあり、東横堀に近いところにある。

安永６（1777）年の『難波丸綱目』（図３）では、石切細工が西横堀、松屋町にそれぞれ五十軒ばかりあり、この場所が石工の拠点であったことがうかがえる。石問屋は延享期と同じく権右衛門町、長堀十丁目に位置する。安堂寺町にも見られるが、塩町のものが北に移動したとみられる。前代と同じ傾向が見られる一方で、西船場では江戸堀沿いの玉沢町に石問屋が出現し、木津川、安治川の河口にも諸国石問屋が分布する。

大坂案内記において石問屋の名前は記されていたが、石工はおおよその人数のみが記されていた。石工の名前がはっきりするのは文政７（1824）年の『商人買物独案内』（図４）以降である。権右衛門町の和泉屋仁右衛門、新渡辺橋の小島屋半兵衛、新町橋西詰一筋南入の西川屋五良兵衛、炭屋町の御影屋新三郎は狛犬や燈籠、鳥居などの作例が多く、小島屋半兵衛、御影屋新三郎の作品は畿内一円のみならず遠方でも見られ、大坂を代表する石工と言える。いずれも西横堀に工房を構えていたことがうかがえる。石問屋は諸石所とされており、これまでの権右衛門町、長堀十丁目および、長堀十丁目の東の長堀心斎橋にも位置する。

弘化３（1846）年の『浪花商工名家集』（図５）では小島屋半兵衛、西川屋五良兵衛、御影屋新三郎ら作品の多い石工の名前が確認される。諸石所は権右衛門町、長堀心斎橋に見られる。『商人買物独案内』に比べて紹介されている石工、石所の数は少なくなっており、さらに明治15（1882）年の『浪華の魁』（図６）では石商は５軒と『浪花商工名家集』より増えるが、石工１軒、末吉橋帯屋町角の武輪忠兵衛のみとなっている。

大坂案内記は大阪で入手できる様々な物を紹介した観光ガイドのようなものである。そこに掲載される店の数は、その店の扱う物品が当時の人にとってどれくらい魅力のあったものかを反映する指標とみることができる。『浪華の魁』では洋綛糸や洋反物、時計店など舶来・工業製品が多く紹介されるようになっており、石材・石造物が大坂を代表する産物とは言えなくなってきたことを暗に示して

いるものとみられる。

大坂案内記における石工・石商の分布を時系列で検討してきた。その結果、西横堀、長堀、松屋町が石工・石商の多い町であり、時代が下るにつれ、西横堀の石工が隆盛を誇るようになることが分かった。また石商は石屋、石問屋、石所と名称は様々であるが、諸国からもたらされた石を販売するための石材流通の拠点であった。これらは権右衛門町、長堀十丁目から長堀心斎橋にかけて安定して営まれていた。両町ともに、堀川に沿って細長く伸びており、運河沿いにひらけた町である。石商らは舟運によって石材を運び込んで周辺の石工へと供給したのであろう。また、加工された石製品は再び舟運によって消費地まで運ばれていった。こういった状況が、地図上の石商・石工の分布からうかがえる。

一方、同じ石材でも硯・砥石問屋は淡路町一丁目から本町一丁目に分布していた。町名は違うがいずれも一丁目であり、東横堀に沿って南北に拡がっていることがうかがえる。硯は近江の高島、砥石は山城の愛宕山等が主な石材産地であり、淀川を下って大川－東横堀の経路で石材が運び込まれたとみられる。石材の陸揚げされた東横堀は、硯や砥石の販売が盛んな堺筋と、製造が盛んな堺筋周辺の地に近く、これらの場所へ供給されたのである。これらの状況から、瀬戸内・和泉地方が産地で主に建築材料や石造物となる石材は安治川・木津川から西横堀へ、近江・山城地方が産地で砥石、硯となる石材は東横堀へといった、石材産地や製品によって堀川の使い分けがなされていた可能性が示唆される。

4、町ごとに見た石工・石商人の消長

石工・石商人の消長を各町で示したものが図７である。石造物の銘によると1670年代以前の石工の住所は「大坂」とあるものの、町名が見当たらず、石工が大坂のどの町に居住していたのかは分からない。ところが1670年代から1720年代にかけて銘文から松屋町、立売堀、長堀、西横堀、四ツ橋、炭屋町といった石工・石商人の町が分かり始める。

18世紀中葉には西横堀では権右衛門町、長堀では長堀十丁目と長堀石浜、東横堀～長堀では塩町に諸国石問屋・石屋が出現する。石材加工産業が盛んになったため、石材流通拠点が石工の住む町の近隣に生まれたと考えられる。続く18世紀後半から19世紀にかけて、木津川に諸国石問屋が設けられて石材流通拠点が増加するとともに、既存の石工の町の周辺に新たな石工の居住地が生まれる。東横堀から下寺町、東横堀沿いの安堂寺町（一丁目）がそれに当たる。中でも安堂寺町では石工と石商人が共に見られ、石材流通と加工とがセットになっていたことがうかがえる。このように18世紀中頃には石工の生産活動が活発になると同時に石材流通も整っていき、さらに石商によって材料の供給が安定すると、石工の活動が盛んになるといった相乗作用があったとみられる。18世紀以降、大坂産の狛犬や鳥居といった石造物が日本列島各地で見られるようになる。これは堀川を中心にして、石関連産業の生産と流通とが相俟って発展したことがその背景にあったと考えられる。

５、石を扱う手工業と石工・石商人の比較

17世紀末から20世紀初頭にかけて、各町における石材関連産業の従事者数を示した（表２）。あらためて西横堀、松屋町、炭屋町、長堀・長堀石浜に石工が多いこと、石商が権右衛門町や長堀十丁目に多いことが分かる。砥石・硯問屋、砥石・硯屋は瓦町４軒、備後町４軒、淡路町３軒、本町２軒、堺筋１軒、東横堀平野町１軒があり、北船場に多い。図１～３等に示したように、東横堀に近い一丁目に多く、東横堀沿いに南北に分布する。

石印彫は堂島に３、過書町、高麗橋、佐野屋橋、三津寺町、順慶町御堂筋、船越町、渡辺橋、南堀江、尼崎町、油町に各１というように、堂島、北船場、上町に広く分散して分布しており、堀川に規定された石工・石商人の分布と異なる。同じ石を素材にした産業でも、石印彫は小型品で需要が限られており、重量物であり広域にわたって流通する石造物・石製品と大きく異なる。このような違いが、分布傾向の違いに表れているとみられる。

６、石工・石商の住む町の変遷

ところで、石工・石商が活動を行う町は、当時どのような産業や商業が盛んであったのかを検討してみたい。石工・石商が多く住む町の中で、松屋町、権右衛門町、炭屋町を取り上げる。これらの町は資料が多く、近世から近代への変化を追いやすいためである。

松屋町

この町は手工業生産が盛んな町である。安永６（1777）年の『難波丸綱目』では石切細工人１軒、石塔製造１軒が記される。この町にはその他にも刀脇指小道具中買い２軒、武具馬具諸色商人１軒が挙げられており、この町が武家地に近いことをうかがわせる。また東から南東にかけて拡がる瓦屋町の近くであり、手工業生産が盛んであった。上述した石切細工人、石塔の他に、錠鍛冶、仏具鋳物師、龍吐水細工などの金属加工業、土火鉢といった窯業もあった。さらに火熱を伴う金属加工業・窯業以外にも、縫物師も認められ、手工業生産が密集している状況がうかがえる。

明治34（1901）年の『大阪市商工業資産録』では石細工業として堂馬源蔵、石卸小売として石崎藤三郎が記される。松屋町は江戸時代より手工業生産が盛んであり、この時期においても、上述の石細工業以外に、鋳物製造、鉄鋼製造・金物・義歯・ゴム小売、諸器械製造、硝子製造が営まれ、金属加工業、窯業が維持されていた。大正10（1921）年刊行の『大阪市商工名鑑』では掲載された90軒中、第一に多いものが菓子類25軒であり、玩具15軒がそれに次ぐ。石商は石崎藤三郎、阪下富太郎が見られるが、石細工は見当たらず、金属加工業も金属諸機械器具・金属類及同製品４軒と、食料品に比べかなり少なくなっている。このように松屋町では石関連の産業が衰退し、大正期には菓子や玩具の町へとなっていったことがうかがえる。

権右衛門町

安永６（1777）年の『難波丸綱目』には諸国石問屋２軒、普請方石問屋２軒が記され、長堀十丁目と並んで石問屋の多い町である。同時に、国問屋・船宿が多く、関東筋問屋並びに、讃岐、越中、加賀、能登、長崎、摂津国のものが合計９軒を確認することができる。興味深いことに、堂社彫物師２

軒が居職している。堂社彫物師は社寺建築に関する職である。神社には石燈籠や狛犬、水盤、鳥居などが奉納されており、これらを作る石工と堂社彫物師との間に何らかの影響があった可能性が想像される。

明治時代になると、権右衛門町は、阿波座上１丁目・中１丁目・下１丁目となる。明治34（1901）年の『大阪市商工業資産録』では、阿波座上１丁目に石卸小売の松原嘉右衛門が認められる。明治30年代には、石関連の業種は１軒のみと少なくなっており、また国問屋・舩宿も減少している。代わって、陶器卸と小売といった陶器流通に関わる店が多く、業種が判明する家の20％が陶器関連の職であることが分かる。

大正９（1920）年の『大阪市商工名鑑』では阿波座上１丁目・中１丁目・下１丁目において石材を扱う職は認められない。一方、陶磁器・土器に関する職は11軒にのぼり、全体の約30％を占めている。以上のように、権右衛門町は近世から近代にかけて石商・石工の町から、陶器商の町へと変化していったことがうかがえる。

炭屋町

安永６（1777）年の『難波丸綱目』によると、この町には西国の国問屋・舩宿が多い。炭屋町に居住していることが分かる商人・職人は42名、そのうち26名が西国の産物の問屋・舩宿である。中でも讃岐国、備中国、阿波国といった瀬戸内地方の国問屋と舩宿が多い。

注目されるのは金属関連の商業・産業として、鉄はがね問屋、銅吹屋などが認められることである。銅吹屋には長堀茂左衛門町の泉屋と並び大坂を代表する銅精錬所であった大坂屋が見られる。銅吹きは鉱石を他地域から仕入れて銅を精錬する。精錬された銅は銅座を経て中国や日本各地へ運び出される。銅鉱石、精錬銅とも重量物であるため、それらの運搬には舟が欠かせない。銅吹屋において材料・製品の流通が大きく舟運に依存する状況は石材加工産業と共通しており、両業種が併存して立地することは、炭屋町が水上交通に非常に適した場所であったことを意味する（註３）。

炭屋町は明治期には南北に分かれる。明治34（1901）年の『大阪市商工業資産録』では、南炭屋町130に飯田新三郎の名が認められる。しかし石工業ではなく、石卸小売とのみ記されており、既に石造物の生産が主業務ではなくなっている。飯田新三郎は山上有秀と共に明治24（1891）年、住吉大社の魚料理大阪住吉講魚屋中常夜燈を再建しており、それより、10年間の間に、石造物の製作から石の卸小売業を主体とする業態へと変化したようである。稲荷神社（大阪市生野区）の明治39（1906）年に奉納された百度石には「石商みかげ屋事飯田建之」とあり（天岸1979、p.24）、この石造からも石商として活躍していたことがうかがえる。

大正９（1920）年の『大阪市商工名鑑』では、炭屋町に石関連産業は認められなくなる。南炭屋町・北炭屋町として読み取れる職は、菓子類、米穀、和洋酒類が各３軒、乾物類、器具工具類打刃物及口金類、鏡台衣桁火鉢指物類、板硝子及び鏡類、味醂焼酎が各２軒、生鮮魚、染料・顔料、造船橋梁、団扇・扇子・色紙・短冊・引札、地金及半製品、竹材、鉄砲及び火薬類、土砂、陶磁器類、銅真鍮・鉄管類、農具、半襟、美術工芸品、布団及び蚊帳類、粉類、貿易業、綿類、柳行李・竹籠・籐製品、旅館業、和漢洋薬種、和洋雑貨が各１軒である。石材産業は見られず、西国との密接な交流をしてい

た国問屋・船宿も見られない。炭屋町において、江戸時代に盛んであった石材加工業は、同じく繁栄していた流通と同様に、明治以降、急速に衰退してしまったことがうかがえる。

７、石工・石商の移動

職人が本拠地を移動する事例は多くは無いがいくつかを見出すことができる。御影屋小兵衛は元文・宝暦（1736－1764）に松屋町、それ以後は四ツ橋で活動した石工である。文化８（1811）年までの創作が知られる。

小島屋半兵衛は炭屋町に居住していたとの記述もあるが、石造物には西横堀とあり、『商人買物独案内』および『浪花商工名家集』では西横堀新渡辺橋と記述される。

和泉屋仁右衛門は住吉大社の「諸國總網方總船持總商人中永代常夜燈籠」（延享３（1746）年９月）や、高野山奥之院の周防・山口・毛利宗弘の五輪塔（寛延４（1751）年）では、「大坂伏見堀」とある。しかし東大阪市、津原神社の狛犬（明和６（1769）年）には「大坂阿波座」とあり、『難波丸綱目』、『商人買物独案内』では、いずれも「権右衛門町」と記されている。各石造物、文献の名前が同一人物とすれば、伏見堀から阿波座へと西船場の各堀川を移転し、石商・石工の集まる権右衛門町に落ち着いたとみることができる。

この和泉屋仁右衛門は、安永６（1777）年の『難波丸綱目』において、「普請方石問屋但平船持」と記され、文政７（1824）年の『商人買物独案内』では「石細工所」として掲載されている。大坂案内記では石材流通分野で名前の挙がる和泉屋仁右衛門であるが、上記の石造物の他に、安永４（1775）年の住吉大社には仁右衛門作の石灯籠があり、石工として活躍していたことは確かである。文献と石燈籠のデータを重ね合わせると、和泉屋仁右衛門は石問屋でありかつ石工でもあった可能性が高いとみられる。

御影屋新三郎は、基本的に炭屋町の住所を入れるが、金屋橋（文化５（1808）年）、大黒橋北詰（明治時代）等も見られることが天岸氏によって指摘されている。金屋橋東詰と大黒橋北詰とはほぼ同じ場所を指し、道頓堀と西横堀の交差点、久左衛門町の西にあたる。この場所は木津川を通じて海に出るには便利な場所であり、日本列島各地に燈籠や狛犬、鳥居などの輸出を行った御影屋新三郎ならではの工房立地と言える。また明治時代に名字を名乗るようになってから飯田新三郎となっており、その住所として炭屋町130を見出すことができる。該当する番地を記した地図を探し出すことはできなかったが、明治期の地図では71番地以降の番地は運河沿いの区画になっており、炭屋町130が運河沿いに立地したことが想定される。石工住所が様々に示される御影屋新三郎であるが、道頓堀と西横堀の交差する付近の炭屋町（明治期の南炭屋町）で長期にわたって活躍していたとみられる。

まとめ

大坂案内記および石造物に記された石材流通・加工産業関連の検討をもとに次のことが明らかになった。

安治川、木津川に石材の集積地があり、そこから堀川を経由し、松屋町、長堀十丁目、西横堀の権

右衛門町等の石問屋にもたらされ、さらにその近傍の東横堀、長堀、西横堀～炭屋町などの石工たちが製品を生み出していた。

他地域から石材を仕入れて製品に加工し、それらを各地へ輸出するといった輸入－加工－輸出型の産業に石工・石商は該当する。これに加えて材料・製品が重量物である点で、銅吹業と一致する。銅吹業と石工・石商は近い場所に立地する事例が炭屋町、茂左衛門町とその周辺に認められた。これは舟運が良いことがその原因と考えられる。

18世紀中葉に石問屋が多く出現し、それに応じて石工も増加する。また小島屋半兵衛や御影屋新三郎ら、京阪神一円や日本列島各地で製品が見られる著名な石工が誕生する。18世紀の大坂石工の隆盛には、石商・石工がそれぞれ流通と加工を分業し、共に近接して石材加工産業を成り立たせていたことがその背景にあったと考えておきたい。明治期には石工はしだいに衰退し、石屋も天満堀川、江戸堀、長堀、東横堀にそれぞれ一軒を記すのみとなる。

大坂の石工・石商について歴史地理的に考察を行ってきた。今後も大坂の石工名が刻まれた石造物が各地で明らかにされるであろう。各地と大坂間にみられる石造物の需給関係を含めて、さらに詳細な石工・石商人の分布図を作成し、近世大坂の石工・石商の発展を描き出すことを今後の課題としたい。

註

（註１）高野山奥院の石造物の中には、狛犬や文献記録では確認できなかった17世紀前葉の石工の名前を確認することができる。大坂の石工の活躍が17世紀前葉に遡ることがうかがえる資料として重要である。

（註２）関根達人氏（関根達人2017年）のデータには、新発見の有銘資料として住吉大社21件（石燈籠18、手水鉢２、狛犬１）、高野山奥院２件の新発見資料を含まれているが、今回の筆者のデータベース作成作業において、未だこれらの新発見データと先行文献のデータとの対照が十分できておらず、関根氏の発見したデータを含めることができなかった。

（註３）大坂を代表する銅吹屋の泉屋は茂左衛門町にあり、この東側の松屋町、丹波屋町、北側の塩町、南側の九之助橋に多くの石工・石商が見られる。銅吹屋と石工・石商の立地の共通性がこの事例からもうかがえる。

参考文献

天岸正男1972、「奥院石工名集録」『史迹と美術』42（７）、pp.258-286、史迹・美術同攷会

天岸正男1979、「大坂三郷の石工」『歴史考古学』第３号、pp.15-27、歴史考古学研究会

梅原忠治郎1931、「宮幣大社住吉神社の石燈籠」『上方』２（上）第15号、pp.32-42、上方郷土研究会

奇多樓各主人1934、「徳川前期に於ける大坂の石屋」『上方』第38号、pp.48－50、上方郷土研究会

関根達人2017、「近世石工の基礎的研究１－高野山奥之院と住吉大社」、『人文社会科学論叢』第３号、弘前大学人文社会学部、pp.1-32

奈良文化財同好会1999、『狛犬の研究－大阪府の狛犬－』、奈良文化財同好会

飛田範夫2012「第２章石屋と縄問屋」『大坂の庭園』、pp.37-72、京都大学学術出版会

※本稿は平成25・26年度のJSPS科研費・挑戦的萌芽研究（課題番号：15K12948）の成果をもとに作成した。

図1　難波丸　元禄9（1696）年

図2 難波丸綱目（延享版）延享5（1748）年

図3　難波丸綱目（安永版）安永6（1777）年

図4 商人買物独案内 文政7(1824)年

図５　浪花商工名家集　弘化３（1846）年

図6 浪華の魁 明治15（1882）年

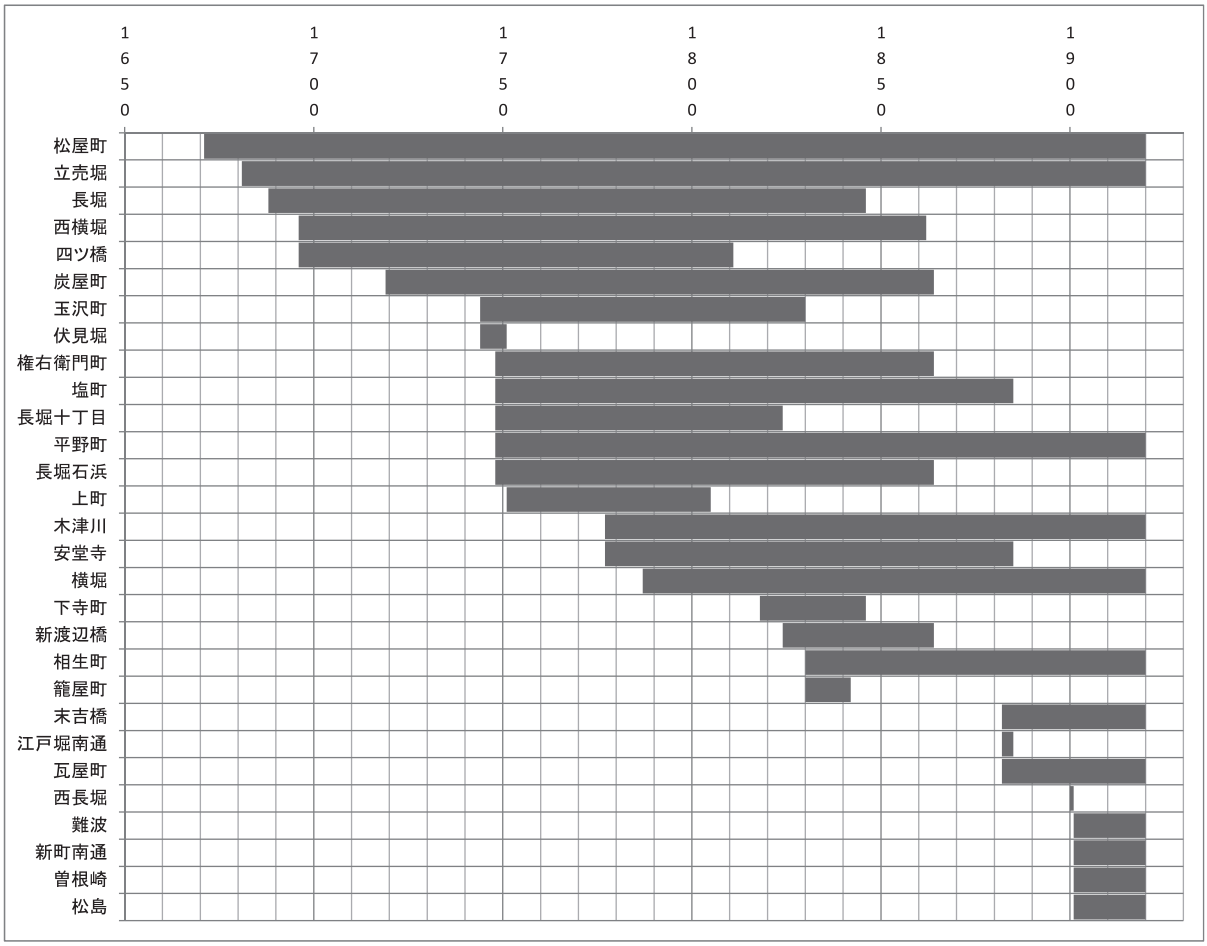

図７　町ごとの石工・石商の消長

表１　大阪の石工・石商（その１～その５）

番号	職	石工名	石工住所	年	西暦	出典	掲載ページ
1	石工	明石屋弥兵衛		文化10	1813	天岸1972	262
2	石印彫	浅見旬蔵	尼崎町	安永６	1777	『難波丸綱目』（安永版）	502下安四　二二ウ
3	石工	尼崎屋治右衛門		明暦３	1657	天岸1972	260
4	石工	尼崎屋治右衛門		宝永５	1708	天岸1972	261
5	石工	尼崎屋治右衛門		享保６	1721	天岸1972	261
6	石工	尼崎屋治右衛門		元文４	1739	天岸1972	261
7	石工	尼崎屋治左衛門		元文５	1740	天岸1972	262
8	石工	尼崎屋友次郎		享保16	1731	天岸1972	261
9	石工	飯田新三郎、山上有秀（右燈と同一の場合）		文政十三年六月（1830年７～８月）	1830	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠098
10	石工	飯田新三郎、山上有秀		文政十三年六月（1830年７～８月）	1830	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠099
11	石工	飯田新三郎、川上徳兵衛		明治二十三年一月（1890年１月）	1890	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠097
12	砥石硯類	伊賀や勘右衛門	瓦町	安永６	1777	『難波丸綱目』（安永版）	491下十一ウ
13	砥石硯類	伊賀屋勘左衛門	瓦町	延享５	1748	『難波丸綱目』（延享版）	147上五十一オ
14	石工	伊佐（　）		天保12	1841	奈良文化財同好会1999	114頁
15	石工	石甚		嘉永７	1854	奈良文化財同好会1999	116頁
16	石工	石甚		万延元	1860	奈良文化財同好会1999	116頁
17	石工	石瀧		文久３	1863	奈良文化財同好会1999	116頁
18	石工	石屋治兵衛	松屋町	延享・寛延（1744－1751）	1744	奇多樓各主人1934	50
19	石工	石屋平兵衛	西横堀	文政９	1826	奈良文化財同好会1999	116頁
20	石工	石屋平兵衛	西横堀	弘化３	1846	奈良文化財同好会1999	116頁
21	石工	石屋平兵衛	西横堀	弘化４	1847	奈良文化財同好会1999	116頁
22	石工	石屋孫兵衛	平野町	延享５	1748	『難波丸綱目』（延享版）	97下二ウ
23	石工	石屋六兵衛	東堀	推文化初	1804	奈良文化財同好会1999	112頁
24	石工	石屋六兵衛	松屋町	弘化３	1864	浪花商工名家集（弘化３年板、1846）	
25	石工	泉宇	相生町	天保（1830－1844）	1830	奇多樓各主人1934	49
26	石工	泉源	松屋町	天保（1830－1844）	1830	奇多樓各主人1934	49
27	石工	泉定	松屋町	寛文十一年（1671年）	1671	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠230
28	石工	泉定	松屋町	寛文十一年（1671年）	1671	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠231
29	石工	泉定	松屋町	享保（1716－1736）	1716	奇多樓各主人1934	49
30	石工	和泉長八		文政13	1830	天岸1972	262
31	石工	和泉屋卯兵衛		寛政５	1793	奈良文化財同好会1999	110頁
32	石工	和泉屋嘉蔵		嘉永	1848	奇多樓各主人1934	50
33	石工	泉屋勘兵衛	東堀	文化８	1811	奈良文化財同好会1999	112頁
34	石工	泉屋勘兵衛	松屋町	文化８年	1811	奈良文化財同好会1999	100頁
35	石工	泉屋勘兵衛	東堀	文化９	1812	奈良文化財同好会1999	114頁
36	石工	泉屋勘兵衛	東堀	文政13	1831	奈良文化財同好会1999	114頁
37	石工	泉勘	松屋町	天保７	1836	奈良文化財同好会1999	114頁
38	石工	和泉屋源兵衛		明和７	1770	奈良文化財同好会1999	110頁
39	石工	和泉屋五郎兵衛			1696	奇多樓各主人1934	50
40	石工	いずみや五郎兵衛	上町	推享和	1801	奈良文化財同好会1999	112頁
41	石工	いずみや五郎兵衛	上町	文化２	1805	奈良文化財同好会1999	112頁
42	砥石硯類	和泉屋治兵衛	淡路町	延享５	1748	『難波丸綱目』（延享版）	147上五十一オ
43	砥石硯類	泉や治兵へ	淡路町	安永６	1777	『難波丸綱目』（安永版）	491下十一ウ
44	石工	泉屋四郎兵衛	権右衛門町	寛政・弘化・安政（1789－1860）	1789	奇多樓各主人1934	49
45	石工	和泉屋四良兵衛（泉屋）	西横堀	文化13	1816	奈良文化財同好会1999	114頁
46	石工	和泉屋四良兵衛（泉屋）	西横堀	文化14	1817	奈良文化財同好会1999	114頁
47	石工	和泉屋四良兵衛（泉屋）	西横堀	推文政初	1818	奈良文化財同好会1999	114頁
48	石工	和泉屋四良兵衛（泉屋）	西横堀	文政２	1819	奈良文化財同好会1999	114頁
49	石工	和泉屋四良兵衛（泉屋）	西横堀	文政５	1822	奈良文化財同好会1999	114頁
50	石工	和泉屋四良兵衛（泉屋）	西横堀	文政10	1827	奈良文化財同好会1999	114頁
51	石工	泉四郎	西横堀	安政３	1856	奈良文化財同好会1999	116頁
52	石工	泉屋長八		弘化３	1846	天岸1972	262
53	石工	泉屋長八				天岸1972	262
54	石工	泉屋長八				天岸1972	262
55	石工	和泉屋長兵衛		享保八年三月（1723年４～５月）	1723	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠014
56	石工	和泉屋長兵衛		宝暦10	1760	天岸1972	262
57	石工	和泉屋長兵衛		宝暦11	1761	天岸1972	262
58	石工	和泉屋長兵衛		明和１	1764	天岸1972	262
59	石工	和泉屋仁右衛門	伏見堀	延享・宝暦・安永（1744－1781）	1744	奇多樓各主人1934	49
60	石工	和泉屋仁右衛門	伏見堀	延享三年九月（1746年１～11月）	1746	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠198
61	石工	和泉屋仁右衛門	伏見堀	延享三年九月（1746年１～11月）	1746	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠199
62	石工	和泉屋仁右衛門	伏見堀	寛延４	1751	天岸1972	262
63	石工	和泉屋仁右衛門	阿波座	明和６	1769	奈良文化財同好会1999	110頁
64	石工	和泉屋仁右衛門		安永四年五月（1775年５～６月）	1775	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠209
65	石工	和泉屋仁右衛門		安永四年五月（1775年５～６月）	1775	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠210
66	石商	和泉や仁右衛門	権右衛門町	安永６	1777	『難波丸綱目』（安永版）	490上十オ
67	石工	いづミ屋仁右衛門	権右衛門町	文政７	1824	商人買物独案内（文政７年板、1824）	
68	石工	和泉屋久七		文政10	1827	奈良文化財同好会1999	114頁
69	石工	泉安	籠屋町	天保（1830－1844）	1830	奇多樓各主人1934	49
70	石工	泉屋安兵衛	籠屋町	天保８	1837	奈良文化財同好会1999	114頁
71	石工	泉屋安兵衛	籠屋町	天保13	1842	奈良文化財同好会1999	114頁
72	石工	和泉屋弥兵工		文化８	1811	奈良文化財同好会1999	114頁
73	石工	和泉屋由兵衛	松屋町	寛政９	1797	奈良文化財同好会1999	112頁
74	石工	和泉屋六兵衛　林兵衛		正徳５	1715	天岸1972	261
75	石工	市兵衛	丹波屋町		1696	難波丸	187
76	石商	井筒屋善五郎	長堀十丁目	延享５	1748	『難波丸綱目』（延享版）	145下四十九ウ
77	石商	年寄　井づゝや善五郎	長堀十丁目	安永６	1777	『難波丸綱目』（安永版）	490上十オ
78	石工	井筒屋善五郎	長堀石浜	弘化３	1864	浪花商工名家集（弘化３年板、1846）	
79	石商	井筒屋善兵衛	長堀石浜	文政７	1824	商人買物独案内（文政７年板、1824）	
80	石工	伊藤屋市兵衛		文政３	1820	天岸1972	262
81	石工	伊兵衛		天保15	1844	奈良文化財同好会1999	116頁
82	石工	伊兵衛		安政６	1859	奈良文化財同好会1999	116頁
83	石工	伊兵衛		文久３	1863	奈良文化財同好会1999	116頁
84	石工	伊予屋市兵衛	玉沢町	天保（1830－1844）	1830	奇多樓各主人1934	49
85	石工	伊予屋又兵衛	玉沢町	延享（1744－1748）	1744	奇多樓各主人1934	49
86	石工	伊豫屋又兵衛		延享二年正月（1745年２～３月）	1745	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠037
87	石工	伊豫屋又兵衛		延享二年正月（1745年２～３月）	1745	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠038

番号	職	石工名	石工住所	年	西暦	出典	掲載ページ
88	石工	伊予屋又兵衛	玉沢町	延享		奇多樓各主人1934	49
89	石工	右衛門		寛永７	1630	天岸1972	259
90	装飾品	うちわや忠兵衛	備後町		1696	難波丸	3429
91	石工	卯兵衛		文政11	1828	奈良文化財同好会1999	114頁
92	石工	海野庄太夫		享保５	1720	天岸1972	261
93	石工	江戸屋七兵衛	松屋町	享保（1716－1736）・天保（1830－1844）	1716	奇多樓各主人1934	50
94	石商	江戸屋七兵衛	長堀十丁目	延享５	1748	『難波丸綱目』（延享版）	145下四十九ウ
95	石商	江戸屋七兵へ	長堀十丁目	安永６	1777	『難波丸綱目』（安永版）	490上十オ
96	石商	江戸屋七兵衛	長堀十丁目	文政７	1824	商人買物独案内（文政７年板、1824）	
97	石工	江戸七	長堀	天保４	1833	奈良文化財同好会1999	114頁
98	石工	江戸屋平兵衛	炭屋町	天保13年（1842）	1842	奇多樓各主人1934	50
99	石商	江戸屋利右衛門	権右衛門町	延享５	1748	『難波丸綱目』（延享版）	145下四十九ウ
100	石工	海老屋市兵衛	長堀	貞享５年	1688	奇多樓各主人1934	49
101	石工	海老屋市兵衛	長堀	元禄２年	1689	奇多樓各主人1934	49
102	石工	海老屋	長堀	天明８年（1788）	1788	奇多樓各主人1934	49
103	石工	大坂屋忠兵衛		宝暦４	1754	奈良文化財同好会1999	110頁
104	石工	大坂屋与三兵衛	松屋町	明和・天保（1764－1844）	1764	奇多樓各主人1934	49
105	石工	大坂屋与三兵衛（大与）	松屋町	天明２	1783	奈良文化財同好会1999	110頁
106	石工	大坂屋与三兵衛（大与）	松屋町	文政９	1826	奈良文化財同好会1999	110頁
107	石工	大坂屋与三兵衛（大与）	松屋町	天保４	1833	奈良文化財同好会1999	110頁
108	石工	大坂屋与三兵衛（大与）	松屋町	天保12	1841	奈良文化財同好会1999	110頁
109	石工	大坂屋和七		文化４	1807	奈良文化財同好会1999	112頁
110	石工	凡五拾軒余　年行司壱人	西横堀	安永６	1777	『難波丸綱目』（安永版）	490上十オ
111	石工	凡五拾軒余　年行司壱人	松屋町	安永６	1777	『難波丸綱目』（安永版）	490上十オ
112	石工	岡田屋五兵衛	長堀	元禄９年	1696	奇多樓各主人1934	49
113	石工	岡田屋五兵衛	長堀	宝永元年	1704	奇多樓各主人1934	49
114	石商	岡田や五兵へ	玉沢町	安永６	1777	『難波丸綱目』（安永版）	490上十オ
115	石商	岡田屋五兵衛	櫂屋町	文政７	1824	商人買物独案内（文政７年板、1824）	
116	石工	岡田屋治兵衛	長堀	延享・天明（1744－1789）	1744	奇多樓各主人1934	49
117	石工	岡田屋治兵衛	長堀石浜	延享五年六月（1748年６～７月）	1748	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠070
118	石工	岡田屋治兵衛	長堀石浜	安永９	1780	奈良文化財同好会1999	112頁
119	石工	岡田治兵衛	長堀石浜	天明四年三月（1784年４～５月）	1784	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠135
120	石工	岡田治兵衛	長堀石浜	天明四年三月（1784年４～５月）	1784	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠136
121	石工	岡田治兵衛	長堀石浜	天明八年九月（1788年９～１月）	1788	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠206
122	石工	岡田治兵衛	長堀石浜	天明八年九月（1788年９～１月）	1788	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠207
123	石工	岡田屋治兵衛	長堀石浜	推寛政	1789	奈良文化財同好会1999	112頁
124	石工	岡治	長堀石浜	寛政五年九月（1793年１～11月）	1793	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠213
125	石工	岡治	長堀石浜	寛政五年九月（1793年１～11月）	1793	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠214
126	石工	岡田屋治兵衛	長堀石浜	文化４	1805	奈良文化財同好会1999	112頁
127	石工	岡田屋治兵衛	長堀石浜	天保15	1844	奈良文化財同好会1999	112頁
128	石工	岡田屋治兵衛、泉四郎		寛政元年九月（1789年１～11月）、再建年：天保六年九月（1835年１～11月）、再再建年：明治元年九月（1868年１～11月）	1868	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠145
129	石工	岡田屋治兵衛、泉四郎		寛政元年九月（1789年１～11月）、再建年：天保六年九月（1835年１～11月）、再再建年：明治元年九月（1868年１～11月）	1868	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠146
130	石工	岡村武助（右燈と同一の場合）	東堀	明治七年十二月（1874年12月）	1874	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠102
131	石工	岡村武助	東堀	明治七年十二月（1874年12月）	1874	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠103
132	石工	男里屋市兵衛		元文元	1736	奈良文化財同好会1999	110頁
133	石工	男里屋市兵衛		宝暦13	1763	奈良文化財同好会1999	110頁
134	石印彫	岳玉渕	過書町	安永６	1777	『難波丸綱目』（安永版）	502下安四　二二ウ
135	石印彫	額迫　雕衆館玉東	佐野屋橋	安永６	1777	『難波丸綱目』（安永版）	502下安四　二二ウ
136	盆石師	神先紹和	瓦町	安永６	1777	『難波丸綱目』（安永版）	502下安四　二二ウ
137	石工	川上徳兵衛、飯田新三郎		明治二十三年一月（1890年１月）	1890	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠096
138	石工	河内氏徳栄（藤原徳栄と同一人物か？）	日向町	延享２年	1745	奇多樓各主人1934	50
139	石工	菊助		元和３	1617	天岸1972	259
140	石工	北野屋長右衛門		元禄12	1699	天岸1972	261
141	石工	吉島六兵衛	上町	天明（1781－1789）	1781	奇多樓各主人1934	50
142	石般工	吉島六兵衛	上町	天明六年二月（1786年２～３月）	1786	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠019
143	石般工	吉島六兵衛	上町	天明六年二月（1786年２～３月）	1786	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠020
144	砥石硯類	木津や忠右衛門	瓦町	安永６	1777	『難波丸綱目』（安永版）	491下十一ウ
145	砥石硯類	木津屋忠左衛門	瓦町	延享５	1748	『難波丸綱目』（延享版）	147上五十一オ
146	砥石硯類	木津屋伝左衛門	本町	延享５	1748	『難波丸綱目』（延享版）	147上五十一オ
147	砥石硯類	木津や傳左衛門	本町	安永６	1777	『難波丸綱目』（安永版）	491下十一ウ
148	石工	喜兵衛		文政12	1829	奈良文化財同好会1999	114頁
149	石印彫	木村吉右衛門	北堀江	安永６	1777	『難波丸綱目』（安永版）	502下安四　二二ウ
150	石工	久蔵・弥左衛門		元和３	1617	天岸1972	259
151	石工	九兵衛	立売堀	貞享３年（1686）	1686	奇多樓各主人1934	49
152	石工	久兵衛		文化９	1812	奈良文化財同好会1999	112頁
153	石工	日下梅吉	京町橋	明治四十年七月建之（1907年７月）	1907	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠217
154	石工	熊吉		文久２	1862	奈良文化財同好会1999	116頁
155	石工	黒田甚兵衛　榎並屋伊兵衛正次		寛文12	1672	天岸1972	260
156	石工	洛東白川村源助		天保七年三月（1836年４～５月）	1836	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠001
157	石工	洛東白川村源助		天保七年三月（1836年４～５月）	1836	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠002
158	石工	源七		天保12	1841	奈良文化財同好会1999	116頁
159	石工	源七		天保14	1843	奈良文化財同好会1999	116頁
160	石工	源七		文久２	1862	奈良文化財同好会1999	116頁
161	石工	小右衛門		寛永10	1633	天岸1972	259
162	石工	五右衛門		文政２	1819	奈良文化財同好会1999	114頁
163	石工	小左衛門　市十郎　庄兵衛　半三郎		万治２	1659	天岸1972	260
164	石工	小島屋半兵衛	炭屋町	延宝より弘化	1673	奇多樓各主人1934	50

番号	職	石工名	石工住所	年	西暦	出典	掲載ページ
165	石工	小嶋半兵衛		元禄11	1698	天岸1972	261
166	石工	小島屋半兵衛	西横堀	享和３	1803	奈良文化財同好会1999	112頁
167	石工	小島屋半兵衛	西横堀	文化14	1817	奈良文化財同好会1999	112頁
168	石工	小島屋半兵衛	西横堀	文政四年三月（1821年４～５月）	1821	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠114
169	石工	小島屋半兵衛	西横堀	文政四年三月（1821年４～５月）	1821	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠115
170	石工	小島屋半兵衛	西横堀	天保５	1824	奈良文化財同好会1999	112頁
171	石工	小島屋半兵衛	新渡辺橋	文政７	1824	商人買物独案内（文政７年板、1824）	
172	石工	小島屋半兵衛	西横堀	天保６	1835	奈良文化財同好会1999	90頁
173	石工	小島屋半兵衛	西横堀	天保６	1835	奈良文化財同好会1999	90頁
174	石工	小島屋半兵衛	西横堀	天保乙未年	1835	奈良文化財同好会1999	90頁
175	石工	小島屋半兵衛	西横堀	天保11	1840	奈良文化財同好会1999	90頁
176	石工	小島屋半兵衛	西横堀	天保11	1840	奈良文化財同好会1999	90頁
177	石工	小島屋半兵衛	西横堀	天保12	1841	奈良文化財同好会1999	112頁
178	石工	小島屋半兵衛	西横堀	天保12	1841	奈良文化財同好会1999	112頁
179	石工	小島屋半兵衛	西横堀	天保12	1841	奈良文化財同好会1999	90頁
180	石工	小島屋半兵衛	西横堀	天保13	1842	奈良文化財同好会1999	90頁
181	石工	小島屋半兵衛	西横堀	天保13	1842	奈良文化財同好会1999	90頁
182	石工	小島屋半兵衛	西横堀	天保14	1843	奈良文化財同好会1999	112頁
183	石工	小島屋半兵衛	西横堀	天保15	1844	奈良文化財同好会1999	112頁
184	石工	小島屋半兵衛（右燈と同一場合）	西横堀	弘化四年五月（1847年６～７月）	1847	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠086
185	石工	小島屋半兵衛	西横堀	弘化四年五月（1847年６～７月）	1847	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠087
186	石工	小島屋半兵衛	西横堀	弘化４	1847	奈良文化財同好会1999	90頁
187	石工	小島屋半兵衛	西横堀	嘉永元年	1848	奈良文化財同好会1999	90頁
188	石工	小島屋半兵衛	新渡辺橋	弘化３	1864	浪花商工名家集（弘化３年板、1846）	
189	石工	小西屋善兵衛		安政（1854－1860）	1854	奇多樓各主人1934	50
190	石工	小西屋善兵衛		天明７	1787	奈良文化財同好会1999	110頁
191	石工	小安利助		文久３	1863	奈良文化財同好会1999	116頁
192	石工	五郎兵衛		宝永６	1709	天岸1972	261
193	石工	五郎兵衛		寛延４	1751	天岸1972	262
194	石印彫	近藤忠蔵	順慶町御堂筋	安永６	1777	『難波丸綱目』（安永版）	502下安四　二二ウ
195	石工	さかい佐兵衛		文化６	1809	奈良文化財同好会1999	112頁
196	石商	堺屋佐兵衛	塩町	延享５	1748	『難波丸綱目』（延享版）	145下四十九ウ
197	石工	堺屋善兵衛		享保十二年九月（1727年１～11月）	1727	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠039
198	石工	堺屋善兵衛（左燈と同じの場合）		享保十二年九月（1727年１～11月）	1727	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠040
199	石工	堺屋善兵衛（右燈と同一の場合）		享保十二年九月（1727年１～11月）	1727	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠063
200	石工	堺屋善兵衛		享保十二年九月（1727年１～11月）	1727	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠064
201	石商	堺や左右衛門	安堂寺	安永６	1777	『難波丸綱目』（安永版）	490上十オ
202	石工	堺屋佐右衛門	安堂寺	文政７	1824	商人買物独案内（文政７年板、1824）	
203	石工	坂屋半兵衛		明和７	1770	奈良文化財同好会1999	110頁
204	石工	左近（兵工）		天保９	1838	奈良文化財同好会1999	114頁
205	石工	左内		寛永14	1637	天岸1972	259
206	石工	左内		寛永15	1642	天岸1972	259
207	石工	三郎兵衛	伏見堀	宝暦（1751－1764）	1751	奇多樓各主人1934	49
208	石工	佐兵衛		文政７	1824	奈良文化財同好会1999	114頁
209	石工	美濃赤阪山産東雲堂		慶應二年正月（1866年２～３月）	1866	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠223
210	石工	美濃赤阪山産東雲堂		慶應二年正月（1866年２～３月）	1866	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠224
211	石工	次兵衛	炭屋町	宝暦２	1752	奈良文化財同好会1999	110頁
212	盆石師	順石軒	本町	安永６	1777	『難波丸綱目』（安永版）	502下安四　二二ウ
213	石工	照信		文久２	1862	奈良文化財同好会1999	116頁
214	石工	庄兵衛		寛文３	1663	天岸1972	260
215	石工	庄兵衛		寛文４	1664	天岸1972	260
216	石工	庄兵衛　三郎兵衛		寛文６	1666	天岸1972	260
217	石工	代田屋新兵衛		文政11	1828	奈良文化財同好会1999	114頁
218	石工	代田屋新兵衛		文政12	1829	奈良文化財同好会1999	114頁
219	石工	湯屋町濱代田屋新兵ヱ		嘉永六年六月（1853年７～８月）	1853	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠147
220	石工	湯屋町濱代田屋新兵ヱ		嘉永六年六月（1853年７～８月）	1853	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠148
221	石工	甚右衛門		万治３	1660	天岸1972	260
222	石工	甚左衛門		寛永４	1627	天岸1972	259
223	石工	甚左衛門		寛永10	1633	天岸1972	259
224	石工	新助		文化12	1815	奈良文化財同好会1999	114頁
225	石工	新助	下寺町	弘化３	1846	奈良文化財同好会1999	116頁
226	石工	甚兵衛		寛文９	1669	天岸1972	260
227	石工	吹田屋喜八	北堀江	寛政（1789－1801）	1789	奇多樓各主人1934	50
228	石工	吹田屋喜八	北堀江	寛政７	1795	奈良文化財同好会1999	112頁
229	石工	杉和	東堀	嘉永３	1850	奈良文化財同好会1999	116頁
230	石工	杉和	東堀	嘉永６	1853	奈良文化財同好会1999	116頁
231	石工	杉和	東堀	嘉永６	1853	奈良文化財同好会1999	101頁
232	石工	杉和	東堀	安政４	1857	奈良文化財同好会1999	101頁
233	石工	杉和	東堀	安政４	1857	奈良文化財同好会1999	101頁
234	石工	杉和	東堀	安政４	1857	奈良文化財同好会1999	101頁
235	石工	杉和	東堀	安政５	1858	奈良文化財同好会1999	101頁
236	石工	杉和	東堀	文久２	1862	奈良文化財同好会1999	101頁
237	石工	杉和	東堀	慶応２	1866	奈良文化財同好会1999	101頁
238	石工	助三郎		文化５	1808	奈良文化財同好会1999	112頁
239	石工	助三郎		文化13	1816	奈良文化財同好会1999	112頁
240	石印彫	清白主人	堂島	安永６	1777	『難波丸綱目』（安永版）	502下安四　二二ウ
241	石工	清兵衛		貞享１	1684	天岸1972	260
242	石印彫	石樵主人	堂島	安永６	1777	『難波丸綱目』（安永版）	502下安四　二二ウ
243	石工	善兵衛		文化13	1816	奈良文化財同好会1999	114頁
244	石工	宗七		嘉永５	1852	奈良文化財同好会1999	116頁
245	石印彫	曽谷仲介	高麗橋	安永６	1777	『難波丸綱目』（安永版）	502下安四　二二ウ
246	石印彫	園七介	三津寺町	安永６	1777	『難波丸綱目』（安永版）	502下安四　二二ウ
247	石工	太（　）・五（　）		元和８	1622	天岸1972	259
248	石工	太郎左衛門		寛永２	1625	天岸1972	259
249	石工	太郎左衛門		寛永２	1625	天岸1972	259
250	石印彫	端山圖南	船越町	安永６	1777	『難波丸綱目』（安永版）	502下安四　二二ウ

番号	職	石工名	石工住所	年	西暦	出典	掲載ページ
251	石工	淡藤	長堀	天保13	1842	奈良文化財同好会1999	114頁
252	石工	忠兵衛		文久２	1862	奈良文化財同好会1999	116頁
253	石工	長右衛門		元禄16	1703	天岸1972	261
254	石工	堺湊長兵衛		明治三年九月（1870年９～１月）	1870	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠076
255	石工	堺湊長兵衛（左燈と同一の場合）		明治三年九月（1870年９～１月）	1870	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠077
256	石工	寺（　）左内		寛永15	1638	天岸1972	259
257	石工	寺（　）左内		寛永20	1643	天岸1972	259
258	碁石屋	どいや忠兵へ	具足屋町	安永６	1777	『難波丸綱目』（安永版）	496上十六オ
259	石工	藤助	佐野	安政６	1859	奈良文化財同好会1999	116頁
260	石工	藤兵衛、石ト		嘉永３	1850	奈良文化財同好会1999	116頁
261	石工	徳蔵		文久２	1862	奈良文化財同好会1999	116頁
262	石工	徳蔵		文久２	1862	奈良文化財同好会1999	116頁
263	石工	長堀石工中	長堀	寛政４年	1792	奇多樓各主人1934	49
264	石工	中村屋勘兵衛	松屋町	宝暦（1751－1764）	1751	奇多樓各主人1934	50
265	石工	中村屋半六	炭屋町	寛政（1789－1801）	1789	奇多樓各主人1934	50
266	石工	中村屋半六		寛政３	1791	奈良文化財同好会1999	110頁
267	石工	中村屋半六		寛政８	1796	奈良文化財同好会1999	110頁
268	石工	名田屋喜兵衛	長堀	弘化３年（1846）	1846	奇多樓各主人1934	49
269	石工	灘屋五郎兵衛	長堀	享保12年、寛延２年等	1727	奇多樓各主人1934	49
270	石工	名田屋太郎兵衛、岡田屋治兵衛、和泉屋仁右ヱ門		延享五年六月（1748年６～７月）	1748	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠069
271	石工	名田屋太郎兵衛	長堀	延享５年（1748）	1748	奇多樓各主人1934	49
272	石工	名田屋五郎兵衛		宝暦六年正月（1756年１～２月）	1756	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠067
273	石工	名田屋五郎兵衛		宝暦六年正月（1756年１～２月）	1756	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠068
274	石工	名田門太郎兵衛		寛政９	1779	天岸1972	262
275	石商	なだや太兵へ	長堀十丁目	安永６	1777	『難波丸綱目』（安永版）	490上十オ
276	石商	灘屋太郎兵へ	長堀十丁目	延享５	1748	『難波丸綱目』（延享版）	145下四十九ウ
277	石商	灘屋太郎兵衛	長堀石浜	文政７	1824	商人買物独案内（文政７年板、1824）	1
278	石工	難波屋賀七		天保	1830	奇多樓各主人1934	50
279	石工	なんばや嘉七	立売堀	天保12	1841	奈良文化財同好会1999	116頁
280	石工	難波屋九左衛門	立売堀	天和（1681－1684）	1681	奇多樓各主人1934	49
281	石工	難波屋九左衛門		延享２年	1745	奇多樓各主人1934	50
282	石工	難波屋九左衛門陳定		享保二十年九月（1735年１～11月）	1735	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠153
283	石工	難波屋九左衛門陳定		享保二十年九月（1735年１～11月）	1735	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠154
284	石工	西川屋五良兵衛	横堀	天明７	1787	奈良文化財同好会1999	110頁
285	石工	西川屋五郎兵衛	西横堀	寛政・文化（1789－1818）	1789	奇多樓各主人1934	50
286	石工	西川屋五良兵衛	横堀	寛政７	1795	奈良文化財同好会1999	110頁
287	石工	西川屋五良兵衛	横堀	文化７	1810	奈良文化財同好会1999	110頁
288	石工	西川屋五良兵衛	横堀	文化10	1813	奈良文化財同好会1999	88頁
289	石工	西川屋五良兵衛	横堀	文化13	1816	奈良文化財同好会1999	110頁
290	石工	西川屋五良兵衛	新町	弘化３	1864	浪花商工名家集（弘化３年板、1846）	
291	石工	西田新九郎正義		宝暦９	1759	奈良文化財同好会1999	110頁
292	石工	野田屋半兵衛		寛文13	1673	天岸1972	260
293	砥石硯類	袴屋利兵衛	備後町	延享５	1748	『難波丸綱目』（延享版）	147上五十一オ
294	砥石硯類	袴屋利兵へ	備後町	安永６	1777	『難波丸綱目』（安永版）	491下十一ウ
295	石印彫	橋本貞元	堂島	安永６	1777	『難波丸綱目』（安永版）	502下安四　二二ウ
296	装飾品	八郎兵衛	伏見町		1696	難波丸	3432
297	石商	樋口屋加右衛門	権右衛門町	文政７	1824	商人買物独案内（文政７年板、1824）	
298	石工	樋口屋加右衛門		文政11	1828	天岸1972	262
299	石商	樋口屋嘉右衛門	権右衛門町	弘化３	1864	浪花商工名家集（弘化３年板、1846）	
300	石商	樋口屋次右衛門	権右衛門町	延享５	1748	『難波丸綱目』（延享版）	145下四十九ウ
301	石商	樋口や長兵へ	権右衛門町	安永６	1777	『難波丸綱目』（安永版）	490上十オ
302	石工	樋口屋利助		天保13	1842	天岸1972	262
303	石工	彦作		寛永11	1634	天岸1972	259
304	石工	平野屋嘉右衛門		享保12	1727	天岸1972	261
305	砥石硯類	平野屋権兵衛	備後町	延享５	1748	『難波丸綱目』（延享版）	147上五十一オ
306	砥石硯類	平のや権兵へ	備後町	安永６	1777	『難波丸綱目』（安永版）	491下十一ウ
307	砥石硯類	平野屋四郎兵衛	淡路町	延享５	1748	『難波丸綱目』（延享版）	147上五十一オ
308	石工	平野屋長右衛門		安永５	1776	天岸1972	262
309	石工	福島出雲		元文３年	1738	奇多樓各主人1934	50
310	石工	福島出雲		延享２年	1745	奇多樓各主人1934	50
311	石工	福島重兵衛安好	平野市町	延享５	1748	奈良文化財同好会1999	110頁
312	石工	古藤平助		宝暦２	1752	天岸1972	262
313	石工	古藤平助		宝暦６	1756	天岸1972	262
314	石工	坊主弥	西横堀	文久２	1862	奈良文化財同好会1999	116頁
315	石工	本庄屋吉兵衛		元禄15	1702	天岸1972	261
316	石工	本庄屋吉兵衛		宝永１	1704	天岸1972	261
317	石工	本庄屋吉兵衛		宝永１	1704	天岸1972	261
318	石工	本庄屋吉兵衛　高内源太郎　正木惣兵衛		正徳４	1714	天岸1972	261
319	石工	松屋甚兵衛		享保五年十一月（1720年11月～12月）	1720	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠229
320	石工	松屋与兵衛		元禄７	1694	天岸1972	260
321	碁石屋	丸屋仁兵へ	塩町	安永６	1777	『難波丸綱目』（安永版）	496上十六オ
322	石印彫	三浦掃部	渡辺橋	安永６	1777	『難波丸綱目』（安永版）	502下安四　二二ウ
323	石工	御影臼屋清三郎		嘉永四年五月（1851年５～６月）	1851	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠090
324	石工	御影臼屋清三郎		嘉永四年五月（1851年５～６月）	1851	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠091
325	石工	御影屋吉右衛門	松屋町	享保（1716－1736）	1716	奇多樓各主人1934	50
326	石工	御影屋吉右衛門		享保三年五月（1718年５～６月）	1718	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠228
327	石工	みかげ屋久兵衛		天保２	1831	奈良文化財同好会1999	114頁
328	石商	御影や源右衛門	安治川	安永６	1777	『難波丸綱目』（安永版）	489下九ウ
329	石工	御影屋小兵衛	松屋町	元文・宝暦（1736－1764）	1736	奇多樓各主人1934	50
330	石工	御影屋小兵衛	四ツ橋	明和７	1770	奈良文化財同好会1999	110頁
331	石工	御影屋小兵衛	四ツ橋	明和８	1771	奈良文化財同好会1999	110頁
332	石工	御影屋小兵衛	四ツ橋	文化８	1811	奈良文化財同好会1999	110頁
333	石工	御影屋治兵衛		享保十八年正月（1733年２～３月）	1733	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠061
334	石工	みかげや新三郎	炭屋町	享保四年四月（1719年５～６月）	1719	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠058
335	石工	みかげや新三郎	炭屋町	享保四年四月（1719年５～６月）、左燈と同じとして。	1719	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠059

番号	職	石工名	石工住所	年	西暦	出典	掲載ページ
336	石工	御影屋新三郎	西横堀	文化七年三月（1801年４～５月）	1801	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠043
337	石工	御影屋新三郎	西横堀	文化七年三月（1801年４～５月）	1801	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠044
338	石工	御影屋新三郎	炭屋町	文化２	1805	奈良文化財同好会1999	112頁
339	石工	御影屋新三郎	炭屋町	文化４	1807	奈良文化財同好会1999	112頁
340	石工	御影屋新三郎	炭屋町	文化５	1808	奈良文化財同好会1999	112頁
341	石工	みかげや新三良	炭屋町	文化九年四月（1812年５～６月）	1812	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠092
342	石工	みかげや新三良（左燈と同一の場合）		文化九年四月（1812年５～６月）	1812	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠093
343	石工	御影屋新三郎	炭屋町	文化13	1816	奈良文化財同好会1999	112頁
344	石工	みかげや新三良	炭屋町	文化十五年三月（1818年４～５月）	1818	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠031
345	石工	御影屋新三郎	炭屋町	文政六年六月（1823年７～８月）	1823	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠173
346	石工	御影屋新三郎	炭屋町	文政六年六月（1823年７～８月）	1823	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠174
347	石工	御影屋新三郎	炭屋町	文政７	1824	奈良文化財同好会1999	112頁
348	石工	御影屋新三郎	炭屋町	文政７	1824	商人買物独案内（文政７年板、1824）	
349	石工	御影屋新三郎	炭屋町	文政８	1825	奈良文化財同好会1999	112頁
350	石工	みかげや新三郎	炭屋町	嘉永五年正月（1852年１～２月）	1852	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠065
351	石工	みかげや新三郎（左燈と同一の場合）		嘉永五年正月（1852年１～２月）	1852	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠066
352	石工	みかけや新三郎	炭屋町	安政三年九月（1856年９～１月）	1856	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠182
353	石工	みかけや新三郎	炭屋町	安政三年九月（1856年９～１月）	1856	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠183
354	石工	みかげや新三郎	炭屋町	弘化３	1864	浪花商工名家集（弘化３年板、1846）	
355	石工	御影屋新三郎昌興	炭屋町	文化十五年三月（1818年４～５月）	1818	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠032
356	石工	御影屋新三郎豊昌	炭屋町	寛政（1789－1801）	1789	奇多樓各主人1934	50
357	石工	御影屋新六	下寺町	文政（1818－1830）	1818	奇多樓各主人1934	50
358	石工	御影屋新六	下寺町	文政８	1825	奈良文化財同好会1999	114頁
359	石工	御影屋新六	下寺町	文政11	1828	奈良文化財同好会1999	114頁
360	石工	御影屋七兵衛	松屋町	享保・元文（1716－1741）	1716	奇多樓各主人1934	50
361	石工	見影屋七兵衛		享保四己亥歳十二月吉日（1720年１～２月）	1720	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠218
362	石工	御影屋安兵衛	松屋町	宝暦（1751－1764）	1751	奇多樓各主人1934	50
363	石印彫	水野尾正珉	南堀江	安永６	1777	『難波丸綱目』（安永版）	502下安四　二二ウ
364	石工	村井友七		寛政８	1796	奈良文化財同好会1999	112頁
365	石印彫	村上九兵へ	油町	安永６	1777	『難波丸綱目』（安永版）	502下安四　二二ウ
366	石工	京之住森仁左衛門		貞享元年仲夏（1684年６～７月）	1684	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠238
367	石工	京之住森仁左衛門		貞享元年仲夏（1684年６～７月）	1684	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠239
368	石工	安枝定七		寛政12	1800	奈良文化財同好会1999	112頁
369	石工	安枝定七		享和２	1802	奈良文化財同好会1999	112頁
370	石工	柳屋国松		嘉永元	1848	奈良文化財同好会1999	116頁
371	石工	柳屋国松		嘉永２	1849	奈良文化財同好会1999	116頁
372	石工	柳屋国松		嘉永２	1849	奈良文化財同好会1999	116頁
373	石工	弥七		文政２	1819	奈良文化財同好会1999	114頁
374	石工	山田武平		文政13	1830	奈良文化財同好会1999	114頁
375	石工	堺大和屋久兵衛		寶永七年正月（1710年１～２月）	1710	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠118
376	石工	堺大和屋久兵衛		寶永七年正月（1710年１～２月）	1710	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠119
377	石工	堺大和屋久兵衛		享保七年二月（1722年３～４月）	1722	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠227
378	石工	大和屋三郎兵衛	上町	宝暦（1751－1764）	1751	奇多樓各主人1934	50
379	石工	大和屋庄兵衛（大庄）		天明３	1783	奈良文化財同好会1999	110頁
380	石工	大和屋庄兵衛（大庄）		文政４	1821	奈良文化財同好会1999	110頁
381	石工	大和屋庄兵衛（大庄）		文政５	1822	奈良文化財同好会1999	110頁
382	石工	大和屋庄兵衛（大庄）		文政６	1823	奈良文化財同好会1999	110頁
383	石工	大和屋庄兵衛（大庄）		文政８	1825	奈良文化財同好会1999	110頁
384	石工	大和屋庄兵衛（大庄）		文政８	1825	奈良文化財同好会1999	110頁
385	石工	大和屋庄兵衛（大庄）		天保５	1834	奈良文化財同好会1999	110頁
386	石工	湯川半兵衛		延宝７	1679	天岸1972	260
387	石工	与七郎・助衛門		万治２	1659	天岸1972	260
388	石工	萬屋太郎右衛門		元禄	1688	奇多樓各主人1934	50
389	石工	利兵衛		慶応元	1865	奈良文化財同好会1999	116頁
390	石工	和田屋勘兵衛	松屋町	文政（1818－1830）	1818	奇多樓各主人1934	49
391	石工	和田屋藤助	松屋町	天保（1830－1844）	1830	奇多樓各主人1934	49
392	石工	和田屋由兵衛	松屋町	寛政（1789－1801）	1789	奇多樓各主人1934	49
393	石工	（　）左衛門		寛永21	1644	天岸1972	260
394	石工	明（　）（　）門正（　）		元禄９	1696	天岸1972	261
395	石工	（不明）	西横堀		1696	難波丸	3036
396	石工	（不明）	松屋町		1696	難波丸	3037
397	石工	（不明）	四ツ橋		1696	難波丸	3038
398	石工	（不明）	天神橋石屋浜		1696	難波丸	3039
399	砥石硯類	（不明）	東横堀平野町		1696	難波丸	3196
400	石塔	（不明）	西横堀		1696	難波丸	4029
401	石塔	（不明）	松屋町		1696	難波丸	4030
402	砥石硯類	（不明）	堺筋		1696	難波丸	4053
403	石工		西横堀	延享５	1748	『難波丸綱目』（延享版）	170下七十三ウ
404	石工		長堀	延享５	1748	『難波丸綱目』（延享版）	170下七十三ウ
405	石工		西横堀	延享５	1748	『難波丸綱目』（延享版）	170下七十三ウ
406	石工		長堀	延享５	1748	『難波丸綱目』（延享版）	170下七十三ウ
407	石臼		西横堀	延享５	1748	『難波丸綱目』（延享版）	170下七十三ウ
408	石臼		西横堀	延享５	1748	『難波丸綱目』（延享版）	170下七十三ウ
409	砥石硯類		東堀	延享５	1748	『難波丸綱目』（延享版）	171上七十四オ
410	碁石屋		塩町	延享５	1748	『難波丸綱目』（延享版）	174上七十七オ
411	石塔		松屋町	延享５	1748	『難波丸綱目』（延享版）	175下七十八ウ
412	石塔		西横堀	延享５	1748	『難波丸綱目』（延享版）	175下七十八ウ
413	石塔		天満堀川	延享５	1748	『難波丸綱目』（延享版）	175下七十八ウ
414	砥石硯類	買数不知		延享５	1748	『難波丸綱目』（延享版）	147上五十一オ
415	石工	御（　）（　）		寛延三年十一月（1750年11～12月）	1750	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠240
416	石工	御（　）（　）		寛延三年十一月（1750年11～12月）	1750	住吉大社石灯籠webデータベース	住吉大社石燈籠241
417	石商	（　）や宗三郎	木津川	安永６	1777	『難波丸綱目』（安永版）	489下九ウ
418	砥石硯類	廿五軒		安永６	1777	『難波丸綱目』（安永版）	491下十一ウ
419	碁石屋	同　平兵へ	東樽屋町	安永６	1777	『難波丸綱目』（安永版）	496上十六オ
420	碁石屋	同　市兵へ	淡路町堺筋	安永６	1777	『難波丸綱目』（安永版）	496上十六オ
421	石工	（不明）		天保12	1841	奈良文化財同好会1999	114頁

表２　石を扱う手工業と石工・石商

	石工	石商	砥石硯類	石印彫	碁石屋	石臼	石塔	石般工	装飾品	盆石師	総計（延べ件数）
西横堀	39					2	2				43
松屋町	25						2				27
炭屋町	23										23
東堀	15		1								16
長堀	14										14
長堀石浜	12	2									14
横堀	5										5
伏見堀	5										5
下寺町	4										4
四ツ橋	4										4
上町	4							2			6
玉沢町	3	1									4
立売堀	3										3
籠屋町	3										3
権右衛門町	2	6									8
新渡辺橋	2										2
北堀江	2			1							3
阿波座	1										1
安堂寺	1	1									2
京町橋	1										1
佐野	1										1
新町	1										1
相生町	1										1
丹波屋町	1										1
天神橋石屋浜	1										1
日向町	1										1
平野市町	1										1
平野町	1										1
長堀十丁目		7									7
安治川		1									1
塩町		1			2						3
木津川		1									1
櫂屋町		1									1
瓦町			4							1	5
備後町			4						1		5
淡路町			3								3
本町			2							1	3
堺筋			1								1
東横堀平野町			1								1
堂島				3							3
過書町				1							1
高麗橋				1							1
佐野屋橋				1							1
三津寺町				1							1
順慶町御堂筋				1							1
船越町				1							1
渡辺橋				1							1
南堀江				1							1
尼崎町				1							1
油町				1							1
具足屋町					1						1
淡路町堺筋					1						1
天満堀川							1				1
東樽屋町					1						1
伏見町									1		1
総計	176	21	16	14	5	2	5	2	2	2	245

The masonry and stone wholesale in Early modern Osaka

SUGIMOTO Atsunori

Masonry was working to Early modern Osaka. Amagishi and Kitarokakushujin made a sketch of the address of masonry. In this paper, based on the statement of accounts of the Osaka guidance, such as the “Naniwamaru” and the “Naniwamaruk-oumoku”, it is clarified whereabouts not only masonry but the wholesaler of stone, and the distribution map is created. And it is examined the distribution tendency of modern Osaka’s stone industry. This paper clarified the following thing. The dump of a stone being located in the estuary of Aji river and Kizu river, and going via canals from there, stone is conveyed to the stone sholesale stores at Matsuya-cho, Nagajhori 10 chome and Gonemoncho, Nishiyokobori. And the stone were brought to masonry surrounding Higashiyokobori, Nagahori, Nishiyokobori and Sumiyamachi. It was shown that a copper refinery and stone industry are near. The shipping service is very suitable to the copper refinery and stone industry. Many stone wholesale stores appear about the middle of the 18th century, and masonry also increases according to it. Under these circumstances, it is thought that the masonry representing Osaka were born as Kojimaya Hanbei and Mikageya Shinzamuro, whose works spread to all over Japan.